発掘調査実績報告書

平成12年度徳島市常三島遺跡発掘調査概要報告書

－徳島大学南常三島団地総合教育研究棟建設にともなう埋蔵文化財発掘調査－

2001年8月17日

徳島大学施設委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

1.調査の概要

(1) 遺跡の概要　徳島市常三島遺跡（江戸時代武家屋敷跡）
(2) 遺跡の所在地　徳島市南常三島町２丁目１番地
(3) 調査の理由　徳島大学南常三島団地総合教育研究棟の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
(4) 調査面積　1110.6 ㎡
(5) 調査期間　平成 13 年（2001 年）3 月 15 日～6 月 8 日
(6) 調査主体　徳島大学施設委員会（委員長　齊藤史郎学長）
(7) 調査担当　徳島大学埋蔵文化財調査室（室長　北條芳隆総合科学部助教授）
(8) 調査員　北條、中村　豊（大学開放実践センター助手）、井本尚子・岸本多美子・安山かおり（以上施設部技術補佐員）

2.調査にいたる経緯

平成 13 年 2 月中旬、徳島大学南常三島地区新総合教育研究棟の建設に伴う埋蔵文化財の調査が開始される予定であった。しかし、施工業者の努力にもかかわらず、既設の埋設物（ヒューム管）やそこからの水漏れが激しく、シートパイルの埋設・ウェルポイントの設置などは困難を極め、3 月 15 日、予定よりも少し遅れて発掘調査が開始されることとなった。

調査は当初、中村が担当者として現地に赴く予定であったが、急遽入院することとなり、3 月 15 日（木）から北條が主任として調査に当たり、中村は 4 月 2 日（月）合流し、その後、北條と協力しあいながら調査を進めた。

重機掘削は、3 月 15 日（木）より開始し、3 月 19 日（月）より人力による攪乱部清掃・遺構検出を併行し、3 月 30 日（金）重機掘削を完了した。

調査地点は 1999 年 6 月におこなった工学部共通講義棟新営地、1999 年 6 月～2000 年 7 月にかけておこなった共同溝第Ⅱ期（Ⅱ－1 区・Ⅱ－2 区・Ⅱ－4 区）建設地にともなう発掘調査の隣接地点であった。

工学部共通講義棟新営地の調査においてすでに明らかなように、本調査地点にはすでに既設の建物を解体した部分が 419.5 ㎡存在するため、そこでは、よほど深い深度の掘削を行った遺構（たとえば井戸や溝）以外はすでに江戸時代武家屋敷に伴う遺構は残存していないことが予想された（写真図版 1－上段参照、コンクリートの杭が攪乱部分）。

一方で、調査区の南と西には、既設建物のなかった部分が存在し、すぐ南の隣接地点である、1999 年の共同溝調査（Ⅱ－4 区）でも、調査区の西端で「L」字に交わる大溝が検出されていた。とくに、この調査で検出されていた東西方向に走る大溝は、南側 2/3 ほど

しか検出されておらず、北側 1/3 ほどの検出が予想された。さらに、この東西溝と「L」字に交差する溝が北側へも継続して、「T」字に交差する可能性があった。

また、西側隣接地点である共同溝Ⅱ－2 区では、2 軒の屋敷表付近が検出されている。今回の調査では、これらの屋敷に面した、常三島を南北に貫く道路遺構の検出が予想された。

今回の調査地点の大半は、上記の幹線道路に面し、助任川にも接して立地する常三島地区屈指の名家である民澤（作右衛門）家の裏庭付近に相当すると考えられるが、既設校舎による破壊・明治期に畑作地として利用された時の削平によって屋敷そのものを解明する遺構は、一棟の建物跡をのぞいて残念ながら検出しえなかった。

なお、当初予定では、調査区の北側でも 61 ㎡ほどの調査をおこなう予定であったが、既設建物による攪乱が著しく、立会調査とした。ここからは遺物が若干出土したのみで、遺構は検出できなかった。

3.調査成果

(1) 遺構の概要

常三島遺跡は、現在までの発掘調査によって、おおむね以下のような 3 枚の遺構面が存在することが判明している。

①第 1 遺構面（19 世紀幕末期）

②第 2 遺構面（18 世紀代）

③第 3 遺構面（17 世紀後半～18 世紀前半）

遺構・遺物とも、下層になるにともなって減少する。今回の調査でも、主たる遺構・成果は第 1 ・第 2 遺構面のものである。特に第 3 遺構面では 2 基の溝、4 基のピットを検出しただけで、ともなって出土した遺物も極めて少数にとどまるものである。

(2) 民澤家屋敷地内の「T」字を呈する大溝

既にのべたように、昨年度までの調査で、民澤家屋敷地内に「L」字状を呈する大溝が検出されていた。今回の調査では、予想通り、東西方向大溝の北側の未検出部分（SD03）と、「L」字状大溝がさらに北側へと延びること（SD04）が確認でき、東西・南北の 2 溝が「T」字状に交差することを確認しえた（第 3 図）。

以上の大溝は、おおむね上層・下層に 2 分することができる。まず、下層に規模の大きい溝が掘削される（写真図版 2－上段。規模の全貌が把握できる SD04 を例にとると、深さ約 1m、幅約 4m（写真図版 3－中段）しかも、最深部は既設の建物による攪乱よりも深いほど大規模なものである。そして、SD03 の北肩部と、SD04 の東肩部分に粘質土による盛土をおこなっていた。この盛り土にともなって、SD03 と SD04 の交点、すなわち溝がカーブを描く位置に、多数の板材・丸木杭と盛土による土留めがおこなわれていた（第

4 図、写真図版 2－中下段、同 3－上段)。しかしながら、こうした護岸工事の痕跡は交点以外には認めることはできなかった。

下層溝掘削の時期は、今後の出土遺物の検討を待たねばならないが、管見では第 3 遺構面相当の肥前陶器を見いだしてはいない、したがって、現時点では第 2 遺構面相当時期、すなわち 18 世紀代に掘削されたものと考えておきたい。

SD03 ・ SD04 はその後、徐々に埋没し、幕末期には土地区画の意味を持つ程度の小規模な溝となっていた。最終的には、先に SD04 がこぶし大の結晶片岩を多量に含んだ砂混じりのシルトによって埋没し（写真図版 1－中段)、SD03 が灰色の均質な砂によって意図的に埋められ（写真図版 1－下段)、整地された。この上層には厚さ 10 ㎝程度の耕作土が堆積しており、明治期以降は耕作地として機能していたようで、畝痕および鋤痕若干を確認している。

なお、SD04 の最下層では、鉄製の刃先のはずれた鍬が出土している（写真図版 3－下段)。常三島遺跡からの農具の発見は初めてである。

(3) 道路

常三島地区の武家屋敷群を現在に残す絵図は、各屋敷の地割りとともに、土地を区画し、屋敷表に面する道路の存在をも示している。現在の工学部の正門から北側通用門に向かう校内路が、いままでの調査で判明した屋敷地の配置からおおむねそのうちのひとつを踏襲していることは判明していた。しかしながら、その校内路の真下を掘削した共同溝地区（Ⅱ－1 区・Ⅱ－2 区）の調査では、道路に面して西側の屋敷地内と考えられる遺構群は多数検出しえたものの、道路そのものは検出されなかったのである。今回の調査はそのすぐ東の隣接地を発掘することから、当然道路の検出が予想された。

果たして、明治期の耕作土を取り除くと、硬く叩き固めたような砂質土を検出した。この堅い砂質土は従来検出している屋敷地の造成土とは明確に異なっており、道路を構築するために叩き締められた土であることは間違いないといえるだろう。この硬く締まった砂層は、調査区西端を南北に直進する深さ 20 ㎝・幅 60～70 ㎝程度の小規模な溝（SD01 上層部）によって画されており、この溝より西は、従来通りの屋敷地同様の造成土から成っており、共同溝地区（Ⅱ－1 区・Ⅱ－2 区）の調査において検出された遺構の続き（SD05 ・ SD09）も検出されている。一方、道路の東端の側溝は、残念ながらヒューム管によって破壊されていたとみられ、ヒューム管のすぐ東隣の土層は、すでに道路遺構のものではなく、一般的な屋敷地の堆積土であった。したがって、この道路の道幅はおおむね 2.5m程度、側溝を含めて 3.6m内外、すなわち 2 間程度の規模であった可能性が高いのではないか（第 3 図スクリーントーン部、写真図版 4－上段)。以上のことから、幕末期に比較的小規模な側溝を有した道路の存在は確実となった。そして、この道路は、現在の校内路とは若干東側にずれており、ほぼ東側歩道の下に埋没している。

ところで、この道路遺構はいつまでさかのぼることができるのであろうか。道路遺構相当の締まった堆積土は、途中多量の瓦・陶磁器・石・焼土・炭化物をふくんだ整地層、通称「バラス層」をはさんで、上に3層、下に2層の堆積が認められる（第5図、写真図版4－中段）。この「バラス層」整地以前の2層を道路遺構形成開始期の層とし、「バラス層」形成以前に1度道路として機能していたものと考えておきたい。ただし、これを道路とみた場合、この時期の側溝と目される溝と、西側屋敷地内の諸遺構は著しく切り合っており、境界は明確ではない。また、溝の埋土も部分部分によって異なっており、一度に埋没してはいない。そうすると、側溝すなわち、道路の境界としてどの程度機能していたかは疑問を抱かざるを得ない。

現時点では、両側に溝をそなえた確立した形の道路遺構が成立した時期は、「バラス層」による整地がおこなわれて以降、すなわち幕末期に求めておくのが妥当ではないだろうか。

なお、西側側溝は、「バラス層」形成後、部分的に掘りなおした形跡がみとめられるのであるが、いずれも、第3遺構面相当、すなわち幕末期の遺物が出土しており、比較的新しい時期に側溝も含めた再整備がおこなわれていたとみられる。

(4) 井戸 SE01～SE04

井戸は全部で4基確認することができた。このうちの2基（SE01・SE02）は既設校舎跡の攪乱部分に、隣り合ってかろうじて残存していたものである（写真図版4－下段）。SE01は再下段のみ残存し、直径60㎝、長さ90㎝ほどの桶枠20個によって構築されている。SE02は、直径60㎝ほどであり、井戸側は残存していなかった。長さ80㎝以上の竹筒によって湧水をはかっている。

一方SE03とSE04はSD03に接して構築されていたものである。SE03は、一辺2mほどの掘方で、直径1.2m・34枚の再下段桶枠の上半部がほとんど破壊された状態で検出され、8枚程度の板を円状に加工した底板も残存していた。SD03の下層部埋没後に構築され、幕末期・明治期にはすでに破損・埋没していた（写真図版5－上段）。SE04はSD03下層掘削前に既に存在していたもので、著しい破壊を受けていた。再下段の桶枠が若干残存するのみで、直径は1.5mほどである。

(5) 掘建柱建物

掘建柱建物は、調査区の北東端、機械工学科棟とむすばれる共同溝部分で一棟確認することができた。柱穴はいずれも深さ60～70㎝程度で、30～40㎝付近に石・瓦を敷いて柱を立てている（写真図版5－中段）。狭い調査区であったため、2m間隔の2つの柱穴を確認したのみであって、建物の規模・東西どちらの方向へのびるのかは確認できないが、民澤家屋敷地内で建物跡が検出されたのは初めてである。

4.出土遺物の概要

出土遺物は現在整理中である。瓦類は出土量が莫大なため、県の規定にしたがって選択的に取り上げた（写真図版 5－下段）。遺物は洗浄途上のものもあり、成果は今後にゆだねなければならない。概要は以下の通りである。

陶器・磁器・土器類	コンテナ 32 箱
瓦類（選択採集）	コンテナ 5 箱
金属製品・石製品類	コンテナ 5 箱
木製品・漆器など	コンテナ 21 箱
食物残滓（貝・魚骨など）	コンテナ 1 箱

5.まとめ

今回の調査の成果は、おおむね以下の 2 点にまとめることができよう。

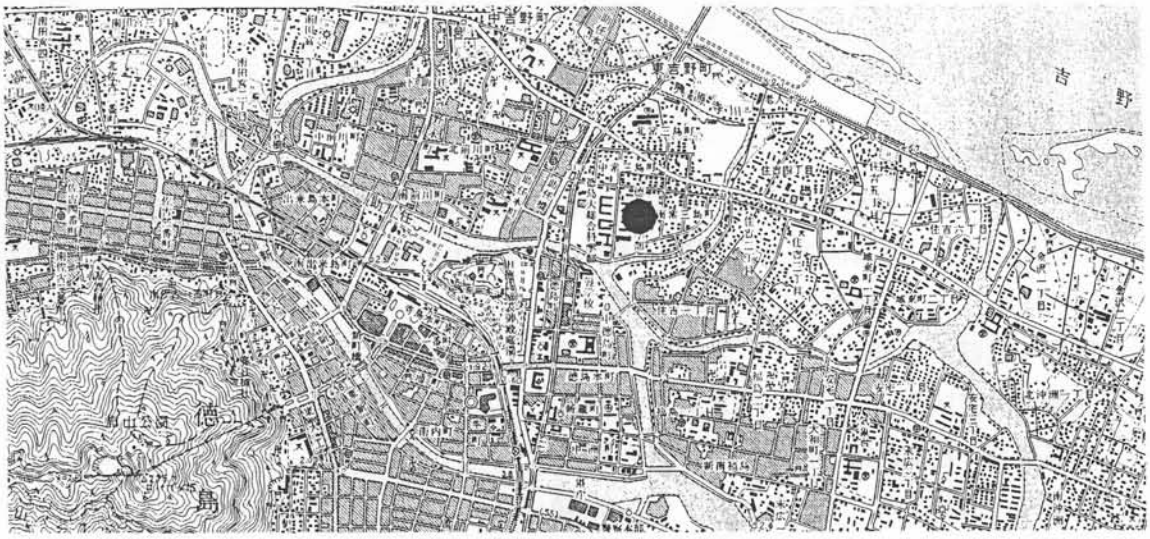
①常三島地区の武家屋敷群に面した南北方向の道路の検出

この道路は、常三島地区の絵図を検証し、しかも工学部内を南北に貫く現在の道路も、ほぼそれを踏襲していることを改めて確認することができた。ただ、問題はこの道路の規模が予想よりも小規模であったということである（第 3 図スクリーントーン部、写真図版 4－上段）。ただ、側溝も含めた幅 2 間（約 3.6m）という数値は、ヒューム管・既設建物による攪乱という制約を含んでの推計であり、今後さらに検証しなければならない。

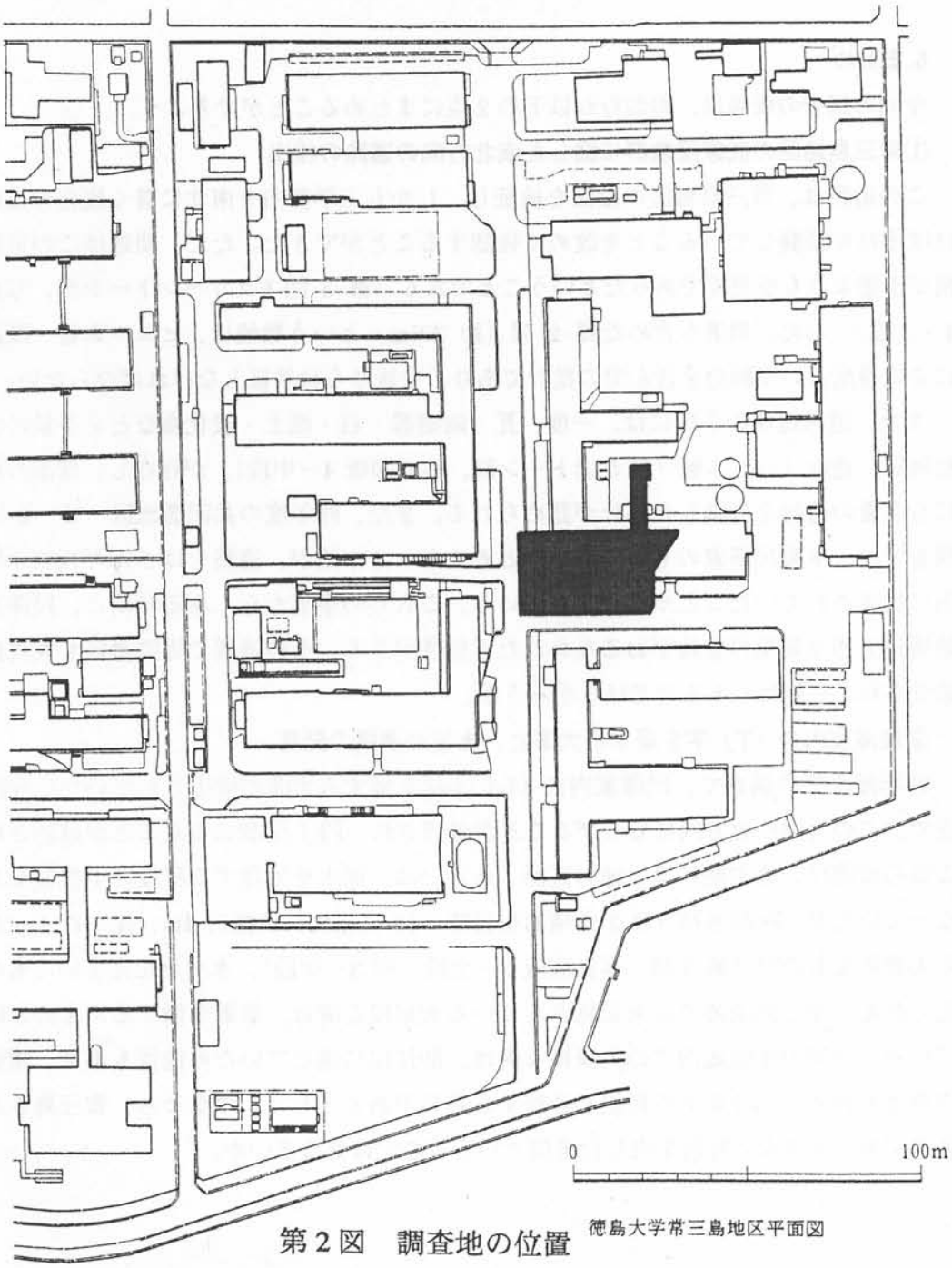
また、道路遺構の下層には、一度、瓦・陶磁器・石・焼土・炭化物などを多量に含んだ整地層、通称「バラス層（第 5 図トーン部、写真図版 4－中段）」が存在し、側溝の埋土中にも多量の遺物を投棄した部分が認められる。また、昨年度の共同溝地区（Ⅱ－2 区）の調査では、本来民澤家のものであったと考えられる木簡が、道路をはさんだ西側の屋敷地内に投棄されていたことが確認されている。これらの事実から、ある時期に、民澤家屋敷地周辺で相当規模の整地がおこなわれた可能性がある。その過程で道路遺構も大規模に再造営された可能性もあるのではなかろうか。

②民澤家内の「T」字を呈する大溝と、土留め遺構の発見

昨年度までの調査で、民澤家内に「L」字状を呈する大溝が検出されていた。今回の調査で、この大溝が北方向にものびることが確認され、「T」字状になることが確認された。これらの溝は、幕末期には土地の区画、あるいは、雨水を処理する程度の小規模なものとなっていたが、掘削当初（第 2 遺構面相当期－18 世紀代）は幅約 4m、深さ約 1m をはかる大規模なもので（第 3 図、写真図版 2－上段、同 3－中段）、水をたたえていたものと考えられる。常三島遺跡で従来発見されている大規模な溝は、屋敷を画するのものに限られている。今回の屋敷地内での大規模な溝は、助任川に通じていた可能性もあり、物資運搬の機能も含めて、今後その機能を考察する必要があるだろう。すなわち、常三島きっての名家である民澤家の特色を表した遺構といえるのではあるまいか。

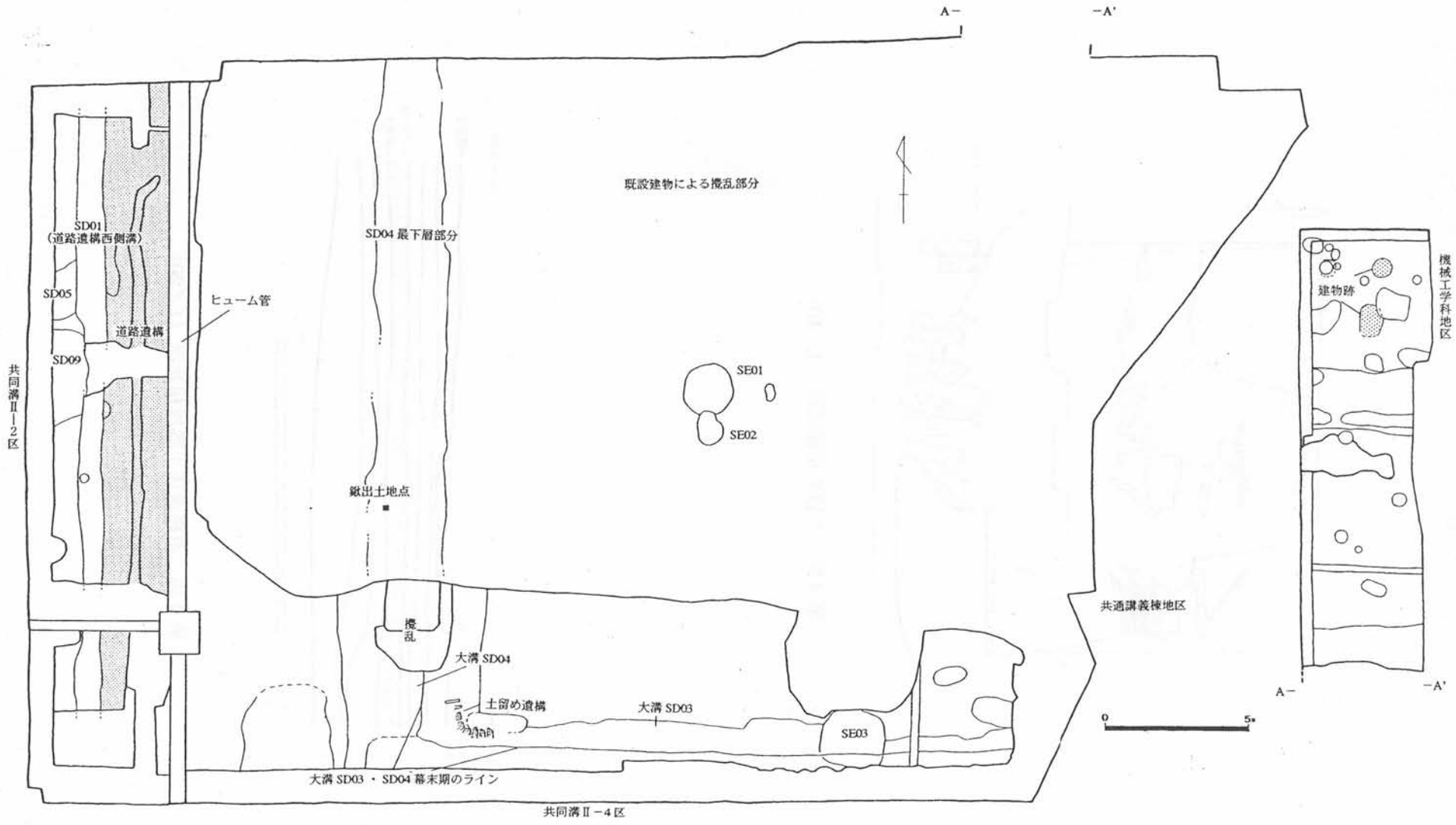


第1図　常三島遺跡の位置

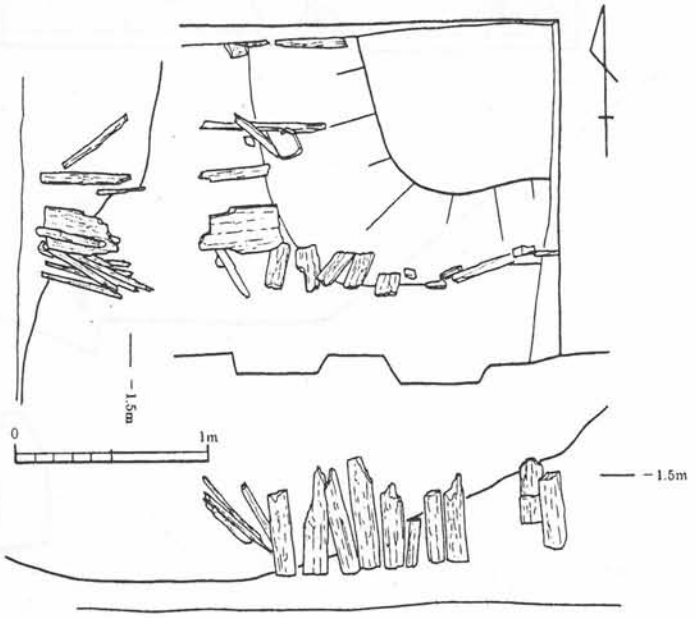


徳島大学常三島地区平面図

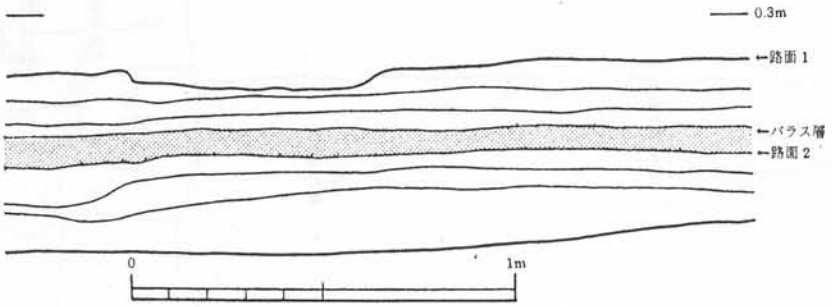
第2図　調査地の位置



第3図　遺構平面図（1/200）



第４図　土留め遺構細部（1／40）



第５図　道路遺構土層堆積状況（1／20）

調査地全景

幕末期（上層）の大溝
SD03 ・ SD04

幕末期の大溝 SD03

大溝 SD03 ・ SD04 と土留の杭列

土留の杭（西より）

土留の杭（北東より）

土留の杭（2）

大溝土層堆積状況

大溝出土鍬

幕末期の道路

（南より、西が側溝）

⬅「バラス層」

道路路面の堆積

井戸 SE01（右）と SE02

井戸 SE03

民澤家敷地内の柱穴

出土した瓦